

---

# パラレルワールド

Benedetto

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パラレルワールド

### 【Nコード】

N8520U

### 【作者名】

Benedetto

### 【あらすじ】

青葉小学校3年1組にやってきた転校生トーマ。小学生青春白書「消えゆく青春の光」「死ぬことの意味」から一年前のお話です。

## ブローグ

太陽が暖かく大地を照らす昼下がりの空の下、その少年はひとり釣りをしていた。深水仁栄<sup>ふかみじんえい</sup>は偶然、橋の下から土手に座って釣りをしているその少年を見つけた。

「おい！ 釣れてるかー？」

自転車で器用に土手を滑り降りると、仁栄は釣りをしている少年の手前でブレーキを掛けた。

「あ！ ごめん！ てつきり知ってるやつかと思っちゃった」

少し照れながら頭をかく。そんな仁栄を少年は気にすることなく返事を返した。

「てーんでダメだ！ さっぱり釣れねー。この赤いモンスターは一体何が好きなんだ？ 醤油センベイじゃあダメなのか？」

少年は釣竿を川の中から引き上げると、ふやけた醤油センベイが姿を現した。

「え！？ 醤油センベイじゃあ釣れないよ！ ってかザリガニだったら網で掬えば一発じゃん！」

「バー力。それじゃあ風情がねーだろーが？」

「ん？ フゼー？ 何だそりゃ？」

仁栄はバカにされたことよりも、少年の言った意味の分からない言葉の方に気が行った。そして改めて少年を良く観察した。白と青のＴシャツの重ね着に、ジーンズのハーフパンツにゴーグル付の野球帽。背格好は来週３年生に上がる仁栄より少し高い。

「何か持ってるのかよ？ この赤いモンスター、ザリガニってのか？ 釣り上げるのによ」

少年はちらりと仁栄の方を一瞥すると、すぐに視線をふやけた醤油センベイの方へ戻す。

「うーん、そうだな。餌を付けなくて、釣りたい場合は……エージたちはよくザリガニの尻の皮を引ん？ いて餌にしてたけど……」

「尻の皮を引ん？いて……？」

少年は顔をしかめる。

「あつ！ 待てよ！ そうだ！」

仁栄は何か思い出して、ポケットの中をゴソゴソと探り始めた。

「あつた！ ザリガニはこいつが大好きなんだ！」

そう言いながら、仁栄は釣り糸にさつきスーパで買ったスルメイカの足をグルグルと巻きつける。

「おつ、サンキュー！」

少年は早速釣竿を川の中に落とす。

「おおつ！！ うりやつ！」

数秒もしないうちに、イカの足に食いついた大きなザリガニが姿を現した。１０分後には少年の持ってきたバケツは山盛りになっていた。

「うわーすげー！！ 水無し川のザリガニ全部捕まえたんじゃないの？」

「へー、ミスナシガワっていうのか、この川」

「え？ 知らないの？」

その時初めて、仁栄はこの少年がこの街の住人じゃないことに気が付いた。この街の中心を流れるこの水無し川のことを、この街の住人が知らないはずがないのだから。

「知るわけねーだろ。オレ、今朝引つ越して来たんだから」

ザリガニで一杯のバケツを持ち上げながら少年は言った。

「そうなんだ。あれ？ どーすんのそれ？」

「キャッチアンドリリースだよ！ うりゃー！」

バケツから投げ出されたザリガニたちは宙に舞った。そしてズボンズボンツと音を立てて次々と川の中へ帰っていった。

「うわー」

「あんなに持って帰ったって、どうしようもねーだろ？」

呆気にとられている仁栄を尻目に、少年は釣竿を折りたたみ始める。

「そうだね。あれ？ もう帰っちゃうの？」

「ああ、まだ引越してきたばかりで片付けも残ってるからな。それにカラスが鳴いたら帰りましようってね」

少年の視線の先を見上げると、数羽のカラスが泣きながら飛んでいた。空はもう夕焼けで真っ赤に染まっている。

橋の下に停めていた自転車、荷台に釣竿を括り付けると、少年は一度だけ仁栄の方を振り向いた。

「オレの名前、トーマってんだ。よろしくな！」

トーマは微笑むと、急斜面となっている土手を自転車で器用にジグザグと登って行った。

「オレの名前はジンエー！ またなー！」

土手を登りきった後、トーマは停まって手を振った。

「またなー！！」

そして橋の向こうへと消えていった。小さくなっていくその少年の後姿を、仁栄は暫くの間嬉しそうに見送っていた。

## 始業式

体育館での始業式の時、各クラスへの担任教師の発表があった。仁栄は新しいクラスの中で整列しながら、無意識に知った顔を捜していた。

「えー、今年度3年1組の担任を勤めさせていただきます、若林宗徳わかばやしむねのりです。学生時代は剣道、サッカーなどをやっておりました。まだまだ駆け出しの新米教師ではありますが、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い致します！」

学生時代剣道をやっていたという若林の爽やかな声は、体育館中に響き渡った。

「やったー！ 男の先生だー！」

「いえーい！」

「よーし！」

「うわー、なんか怖そー」

「うげー、死んだなー」

「えー、結構かつこいいじゃん」

クラスの皆はそれぞれに勝手なことを言って騒ぎ始める。朝起きた時からずっと、担任は絶対に男の先生に受け持ってもらいたいと期待していた仁栄も、一緒に声を上げて喜んでいた。

校長先生からの挨拶で式は終わり、生徒たちは新しい担任の先生に率いられて、順番に新しい教室へと移動し始める。移動中もまだ知った顔はいないかと辺りを見回していた仁栄は、誤って前を歩く生徒の踵を踏んづけてしまった。

「あつ！ 悪りい！ ごめん、ごめん」

「つてなー！！ 何すんだよお！」

仁栄がすぐに謝ったにも拘らず、その少年は狂犬のような物凄い形相で噛み付いてきた。

「だから、悪りいって謝っただろ？」

「あんだとお？」

今にも取っ組み合いの喧嘩が始まろうとしたその時、少年のすぐ後ろから声がした。

「おい、ショージやめろよ！ また先生に睨まれっぞ！」

背の高い少年がふたりの間に割って入る。

「くそがよお」

そう吐き捨てると、ショージと呼ばれた少年はひとりさっさと行っってしまった。

「ショージ短気だから、気をつけろよ。オレ、木崎優二きざきゆうじ。そっちは？」

木崎はぶっきらぼうに名乗ると、仁栄をじっと睨んだ。

「え？ ああ、オレ、深水仁栄、3年1組……ありがとう」

「へー、同じだな」

「そうなんだ！」

「……」

木崎という少年は、なんとなく訝しげな表情を浮かべていたように仁栄には思えた。そんなことを思っていると、周りの生徒は殆どいなくなっていた。仁栄は慌てて新しい教室へと駆け出した。

黒板に書かれた番号をチェックし自分の席を見つけた仁栄は、座ろうとして後ろから声をかけられた。

「あ、僕の名前は本城ほんじょう一。よろしくね」

すぐ後ろの席に座っている、眼鏡をかけた気弱そうな少年が笑っていた。

「よろしく。オレ、深水仁栄」

席に着いてから仁栄は驚いた。自分の二つ前の席にはさっきの狂犬少年、ショージが座っていたからだ。

「はい！ それじゃあ今から出席を取るので、呼ばれたら元気に返事をしてくれよー」

若林は名前を順に呼んでいく。そして呼ばれるたびに元気な声が返っていく。何人か仁栄の知った名前も呼ばれたが、その中に仲の

良い友だちの名前はなかった。それでも仁栄は、新しいクラスに胸を躍らせていた。



## 転校生トーマ

5月の中旬、ゴールデンウィークが明け、クラスの皆もお互いに少ずつ馴染んできたある日の朝、3年1組に転校生がやって来た。  
「遠山冬馬<sup>とおやまふゆま</sup>。よろしくお願いしまーす」

そんな無愛想な挨拶をした転校生を、仁栄は知っていた。他でもないあの日、橋の下でザリガニ釣りをしていた少年だ。  
「よう！」

転校生は仁栄に気がつくと、軽く手を振った。そして近づいて来ようとしたところ……そこを若林の筋肉質な右腕に捕まった。

「これからまだ自己紹介は終わってないぞ」

「うわっ！ すいません」

肩をすくめて頭をかく転校生。クラスの何人かはそんな仕草にクスクスと笑った。

「さてと、せっかくなので、遠山のために一時間目の学活の時間を使つて、質問タイムといこうかな」

「いえーい！！」

「勉強じゃないぞー！」

「はいーい！ 質問、しつもん！」

次々と手を挙げる生徒たちを、若林は順番にあてていく。そして転校生の冬馬は答える。

「先生！」

しばらく質問が続いた後、何処からか低い声が若林の脳を直撃した。クラスを見回しながら、声の主を探し始める。今年で教師3年目の若林。まだ完全に、全員の名前と顔と声を把握しているわけではいなかった。しかし、この低い声に聞き覚えはある。確かに知っている。

「！？ ん？ 岡本！」

「学級委員長として、こんな時のために僕、質問表を作つて持つて

きたんです。使っても良いですか？」

「何？　そうか、そりゃすごい。皆どうだ？」

「いいぞー！　委員長！」

「ゴーゴー！」

「きゃー！　声低くうー！」

若林の合図を待たずに、岡本はさっさと席を立ち持参したプリントを読み始めた。

「お、おい……」

「オホン！　それでは、転校生に質問、ハンドウレエエエドウツ！！！！　ヨオオオオイイイツ、ストウアアアトウ！！！」

岡本は頭にハンカチをバンダナ代わりに巻き、ボディビルダーのようなポーシングで、地を這うような低いバリトンボイスのMCをクラスに放った。それは大人の若林のものよりもさらに低かった。

「……」

こうして先月くじ引きで決まった学級委員長、おかもとりょう岡本了の鬼気迫るパフォーマンスが始まった。

「ニツクネームは？」

「トーマ」

「精神年齢はおいくつ？」

「26歳」

「性別は？」

「男、みりゃーわかるだろー」

「口癖は？」

「バーカ」

「友達といるときのポジションは？」

「何だそりゃ？」

「好きな女性のタイプは？」

「わっ！　何だ？」

「好きな男性のタイプは？」

「バカだろ、おまえ？」

「ナンパする方、される方？」

「せんせー！ ちょっとこの人おかしくくないですか？」

「初恋は何歳？どんな人？」

「おい、ちよつと待てつて！」

「今まで好きになった人の人数は？」

「好きな人のどんな仕草にドキつとくる？」

「付き合うなら年上？ それとも年下？ はたまたタメ？」

「ピーーーーーー！！！！ ピッピッピッ！！！！」

若林は首にかけていた体育用のホイッスルを力いっぱい鳴らした。

「ゼツケン委員長、岡本了！ レッドカード、退場オオオ！！」

「えー！！ 先生ちよつと待つてくださいよー！」

その時ちよつと終業のベルが鳴った。クラス中が一斉に笑い出す。仁栄も笑っていた。

「遠山、悪かったな。とりあえず自己紹介は終わりだ。一番後ろの空いている席、鷺尾の後ろに座つてくれ」

「はい」

若林に肩を軽く叩かれると、冬馬はほつとしたような表情で、指定された席へと向かった。

「はい、それでは1時間目を不本意ながら、終わります。二時間目の体育は、第一グラウンドへ集合してください。今日は50メートル走を測ります。それから岡本はこのあと、先生と一緒に職員室へ来るように。はい、以上です」

「えー！！！」

「ははははははっ！！」

再びクラス中が一斉に笑った。今度は冬馬も笑っていた。それがなんとなく新しい3年1組へ来た新しい仲間へのようこそ、という感じだった。

## 春の遠足

5月のある土曜日の午後、仁栄は自転車で隣の学区にあるスーパーヨシムラへ向かっていた。子供だけで学区外へ出ることは学校により禁止されていたが、来週の遠足のおやつを買うためには、どうしても近所の駄菓子屋だけでは物足りなかった。ひとりで学区外へ出ることは少し心細かったが、まだ新しいクラスに仲の良い友だちがいない仁栄には、ひとりで行くほか選択肢はなかったのだ。色んなお菓子を思い浮かべながら橋を越え、しばらくすると目的地が見えてきた。

スーパーヨシムラは、都内に本社を置き、関東を地盤とする中堅スーパーで、去年この街にも建てられたばかりだった。仁栄は広い駐車場を抜け、駐輪場に自転車を入れる。自転車に鍵をかけていると突然声をかけられた。

「よう！」

振り向くとそこには、先週末た転校生の遠山冬馬がいた。

「トーマ！」

「おっ？ オレの名前覚えてくれてたんだな、サンキュー。ジンエーだったよな？」

冬馬は少し考える仕草を見せた。

「ああ。トーマも遠足のおやつ買いに来たの？」

名前を覚えていてくれた冬馬の方を、仁栄は嬉しそうに見る。

「ま、そんなところだ。確か400円までだったよな？ 何を買うのかなあ……」

「違うよ、トーマ！ 300円までだよ。トーマの前いた学校は400円までだったの？」

「前の学校は1000円までだったっけ。ここはケチィーな」

「マジで！？ 嘘だろ？」

そんなことを話しながら、ふたりは店内へと入って行った。

「なあ、トーマ？　ちょっと玩具コーナー寄ってかないか？」

「ああ、いーぜ。でもオレ、ちょっと先にトイレ行って来る」

そう言うと、冬馬は大急ぎで駆けて行った。

「おい！　トイレの場所知ってんのかよ？　オレ、玩具コーナーにいるからなあー！」

返事をしない冬馬を見送った後、仕方なく仁栄はひとりで店内を見て回ることにした。一階は、宝石、洋服など仁栄にとって興味のないものばかりだ。何度か両親と一緒に来た記憶を辿ってみる。確かお菓子は地下一階で、玩具コーナーは二階にあったことを思い出す。冬馬のことが少し気になったが、トイレの場所は分かっている。もし冬馬が玩具コーナーに現れなければ後で探しに行けばいいだろう。そんな風に考えてから、仁栄は玩具コーナーへと向かった。

玩具コーナーへ着くと、仁栄は一瞬のうちに、ガラスケースの中の恐竜型プラモデルたちに釘付けとなった。大きいものは全長50センチ以上もある。それらを手に取って、持ち上げている自分を想像する。圧倒的な迫力。存在感。恐竜大戦争の始まりだ！　クリスマスが来る前に、なんとか親に買ってもらう方法はないかとあれこれ考えを巡らせる。夏休み中、親の手伝いをする……肩を叩いて、お皿を洗って、洗濯物を畳んで干して、庭の草刈りをして……オレの夏休みが消えていく。それなら通信簿の成績を上げる……無理だろう。通信簿を下げる自信はあったが、上げる自信は全くなかった。「ちくしょう……」

天井を仰ぐように向けた視線の先に、巨大なスクリーンが入ってきた。最新ビデオゲームソフトのコーナーだ。その横はアーケードセンターへと繋がっている。仁栄の両親はゲームを酷く嫌っていて、勉強をしなくなるからという理由で、いくら頼んでも買ってはくなかった。そしてそのうちに仁栄の方も諦めてしまったため、仁栄はゲームについては全く知らなかった。しかしこういうアーケードセンターに全く興味がないといえば嘘になる。お金を使うつもりはな

いが、楽しいな音楽にアナウンスメント、煌びやかなイルミネーションに好奇心は強く刺激され、気がつけば自然と足がそちらを向いていた。

しばらくゲーム機を眺めて回っていると、何処からか誰かの怒鳴り声が聞こえた気がした。声のした方へ目を向けると、数人の少年たちがなにやら騒いでいる様子だ。そしてその中には、同じクラスの狂犬ショージこと、花田将次はなだまさつぐの姿があった。仁栄は暫く離れたところからしばらく様子を見ることにした。

「おめー青葉だろ？　ここ学区外だろーが？　あ？」

「何してんだ、こんなところでよ？」

「迷子にでもなったのかな？　ひやははは！」

サングラスを額に引つ掛けた少年が、花田の方へ一歩出た。そして提げている紙袋を見つける。

「何買ったんだよ？　見せろよ」

「うわーっ、トシくん、それってカ・ツ・ア・ゲ？　イヤーン！」

真っ赤なスマイルTシャツを着た大柄の少年が、身体をくねらせながら怯えた振りをする。

「ひやははは！　ウッチー、その動き超キモイしー」

その横でオカッパ頭の少年は大笑いしている。花田はまだ一言も発していない。

「おいおい？　人が話してる時に、無視すんなよな。氣い悪いいな」

サングラスの少年、トシオが花田の提げている紙袋に手をかけようとしたその時、花田は力いっぱいトシオの顔面に頭突きを放った。

「触んなよおお！」

「ぐわっ！！」

鈍い音と共に頭突きはトシオの鼻っ柱に命中した。短い悲鳴を上

げてトシオはふらふらと二、三步後ずさった後、ドサツと尻餅をついた。

「痛つてええ……」

鼻からダラダラと流れ出る血を手で押さえながらも、トシオは涙目で花田の方を睨みつける。

「てつめえ、トシくんをよくも！ 殺したらあ！」

真っ赤なスマイルTシャツ、赤シャツは顔を真っ赤にして花田に飛びついた。行き成り飛びつかれた花田は、バランスを崩してそのまま赤シャツを上にしたまま倒れ込む。持っていた紙袋は花田の手を離れフロアの上を滑って行った。

「くそっ！」

フロアの上を滑っていた紙袋が、傍で静観していたオカッパの目の前で止まる。嫌な笑みを浮かべながら紙袋の方へ近づく。

「それに触んなああああ！」

赤シャツと揉み合いになりながらも、紙袋に近づくオカッパに気づいた花田は必死の声を絞り出した。

「なんだこりや？ 超キモイ趣味じゃん！」

オカッパは紙袋から透明ケースの箱を取り出す。そこには可愛くドレスアップされた着せ替え人形がポーズを取っていた。

「いらねーし、こんなの」

オカッパは人形を放り投げようと、モーションに入った。

「ヤメロー！」

突然の叫び声に、一瞬皆の動きが止まる。オカッパもそのまま止まっている。

「なんだてめえ？」

そしてオカッパは声の主たちを睨みつけた。そこには怒りを露にした仁栄と、不敵な笑みを浮かべている冬馬の姿があった。

「花田！ 3対1じゃ分が悪いだろ？ 加勢してやらあ！」

そう言い放つと、冬馬は動作の止まっているオカッパから素早く人形のケースを奪い取った。

「あ！ てめえ！ 返せよ、コラア！」

オカッパは眉毛を吊り上げて冬馬の方へ掴み掛かる。その時だった。

「おまえら、何やってるんだー！！」

大人の怒鳴り声が何処からか聞こえてきた。警備員が騒ぎを聞きつけてやって来たのだ。

「やっべ、逃げるぞ！ トシくん！ ショウちゃん！」

花田と組み合っていた赤シャツは、さっさとひとり立ち上がって逃げ出した。

「行こうぜ、トシくん！」

オカッパも走り出す。

「おめーら死んだぜ、この次。ぺっ！」

鼻血まみれの顔をしたトシオは、駆け出す前に花田の方へ唾を飛ばした。

「オレたちも行こうぜ。学校に通報されたくはねーだろ？」

冬馬は小声でそう言うと、二人に合図する。

「おい、待てー！」

警備員が走り去るオカッパたちの方へ気を引かれている間に、仁栄たちはゆっくりとその場を離れた。

「ここからならすぐに脱出も可能だ。とりあえずは大丈夫だろ」

冬馬たちは一階トイレ近くの自販機の所まで戻ってきていた。数十メートル先には、駐輪場へと繋がる出口が見える。

「大丈夫か、花田？」

顔にいくつかの擦り傷、青痣をつけている花田に仁栄は声をかけた。

「ああ、大丈夫だ。すまねえ……」

花田は顔を抑えながら短く答えた。その声はいくらか明るかった。「おう、そうだ。忘れるところだった」

冬馬はくしゃくしゃの紙袋を花田に渡した。あのドサクサの中、



冬馬はすっかり紙袋も回収していたようだ。

「おう、サンキュー……」

「で、これからどうする？」

冬馬は、自販機にコインを放り込みながら質問を投げる。

「今日のところは諦めてこのまま帰るか、それとも地下のお菓子コーナーへ行くか。でもさっきのやつらと鉢合わせするかもしれないし、最悪警備員に見つかるかも……」

「そうだなあ、うーん」

仁栄は腕を組んで考える。せつかくここまで来たのに手ぶらで帰りたいはなかった。しかし冬馬の言う危険も無視できない。

「意外と、さつさと菓子買っちゃまえばいいんじゃないか？ たぶんバレねーし、やつらとも遭わねーよ。おつ、サンキュー」

花田は冬馬から栄養ドリンクをキャッチしながらそう言った。

「え？」

「ははっ！ 花田、おめー意外に樂觀主義だな……そうだな、そうすっか？」

「あ？ ラッカンシユギ？ 何だよ、それ？」

花田は栄養ドリンクを仁栄に手渡しながら、不思議そうな顔を向ける。

「ん？ テッカンズギ？ 誰だそりゃ？ 杉田鉄幹のことか？ あつ、ありがとな」

仁栄はチンプンカンプンな返答と表情を冬馬に向ける。

「それって、仮面ライダーとか改造した人じゃねえか？」

「マジかよ、花田？」

「ああ、間違いねえよ、なあ、遠山？」

「……」

三人は花田の提案通り、地下のお菓子コーナーへと向かった。流石にお菓子の品揃えは仁栄が睨んだとおり、駄菓子屋とは比べ物にならなかった。ちらほらと、小学生のお菓子を選んでいる姿が見える。やはり皆も同じ考えなのだろう。しかしさっきの少年たちや、

警備員は見当たらなかった。冬馬たちを見ると、既に何を買うか決めて来ていたようで、ふたりは次々とお菓子を籠に放り込んでいた。

「急げよ、ジンエー！」

「ああ」

自然と駆け足をするような形で買い物は終了した。

「なんか運動会の練習みたいだったな」

「ははっ」

仁栄がそう言うのと花田は笑った。さっきの栄養ドリンクを飲んでいた時もそうだったが、そんな花田は始業式の時の彼とは全くの別人に見えた。

「オレちよつと用事があるから、またな深水、遠山」

「そうか、じゃあな」

「また明日学校でな！」

自転車の籠に遠足のおやつと紙袋を乱暴に突っ込むと、花田は自転車の変速機をいじりながらペダルをこぎ出す。途中、何かを思い出したかのようにこぐのを止めて、後ろを振り返った。

「ありがとな、今日のこと」

そして花田は自転車を立ちこぎして、あつという間に見えなくなつた。

「……あいつの切り替え、かつこいいな」

自分の古い自転車を睨みながら冬馬は言った。

「え？ トーマのだって切り替え付いてるじゃん」

「これ、壊れてんだよ」

そう言つて、冬馬は切り替えのレバーを軽く押すように叩いた。レバーは、しばらくカラカラと勝手に動いていた。

「あつ！ あはははっ！」

「へへ、ったくダセーよな」

冬馬は自嘲気味に笑いながら、自転車に跨った。

「トーマ？ ありがとな」

「あ？ 何が？」

「さつき、アーケードセンターで、オレが花田を助けようかと迷ってた時あったろ？ あん時トーマがトイレから戻って来てくれなかったら……トーマが行くぞって言うてくれてなかったら……」

申し訳なさそうな表情を仁栄は見せる。

「バーカ、オレがいなくても、おまえはひとりで飛び出してたよ。あんまり無茶すんなよな。でも、あの花田は狂犬みてーなやつだな、マジで」

カラカラと笑う冬馬に、仁栄もなんとか笑顔を見せる。そしてふたりはしばらく無言で自転車をこぎ続けた。

「……そういや、何で花田のやつ着せ替え人形なんか持ってたんだろ？ あれで遊ぶのかあ？」

橋の手前に差し掛かった時、思い出したように仁栄が言った。

「バーカ！ あれは妹への見舞いのプレゼントか何かに決まってるんだろ！」

「え？ あいつ妹いるんだ？ でもトーマ、何でそんなこと知ってるんだよ？」

「何でもねーよ、ってかオレこっちだからもう行くぜ。カラスも鳴いてるし」

冬馬の視線の先を見やると、オレンジ色に染まったキャンパスを黒い影が音を出しながらゆっくりと線を引いていた。さつきからずっと自転車をこいでいたはずなのに、仁栄は全く気がつかないでいたようだ。

「あつ！ 本当だ」

橋の上の眩しい夕焼け空とカラスたちに、しばしば魅せられた仁栄は、先ほどの疑問などすっかり忘れていた。そしてなによりも、冬馬や花田という新しい友だちが出来たことに大きな喜びを感じていた。

## 運動会の練習

春の遠足も無事終わり、次のイベントである運動会へ向けて青葉小学校全体は練習に燃えていた。そして3年1組の体育会系担任、若林もしっかりと燃えていた。

「ピーーーーーー！！！！ ピッピッピッ！！！！」

午後2時の日差しは高く、殆どの生徒はその表情から連日の練習で疲れていることがよく分かる。

「ダラダラしない！ きちんと前の人の後頭部を見て、右足から、イチッ！ ニッ！ イチッ！ ニッ！ ピッ！ ピッ！ ピッ！  
ピッ！」

入場行進の後は、リレーの練習が始まる。仁栄はシューズを脱いで裸足になった。

「リヨウちゃんも男子みたいに裸足になるの？」

「もちろん！ サキも裸足になったら？ 速いよ」

ふとりヨウちゃんと呼ばれた子の方を見ると、髪を後ろで結んだ女の子だった。仁栄は一瞬、意外な表情をしたのだろう。その女の子と眼が合ってしまった。

「ちよつとー！ 何ジロジロ見てんのよー！ やらしいわねー！」

「え？ あ？」

仁栄は一瞬、自分が非難されていることに気がつかないでいた。

「ちよつとりヨウちゃん！」

傍にいたポニーテールの女の子が、仁栄を睨んでいる女の子をなだめる。仁栄はその子を知っていた。いつも髪をお下げにしている、元気で明るく皆に優しくかった。もうひとりのりょうと呼ばれた方は、よく男子と喧嘩しているところを見たことがある。まるで江戸時代の喧嘩屋だ。

「何い？ お、おまえなんか見てねーよ！ バカじゃねーのか！」  
仁栄はムキになって言い返す。別にムキになることではなかったと、分かるのはいつも家に帰ってからのことだ。

「なっ！ 何よぉー！ 人のことおまえって！ まるで女房みたいにいー！ それにバカですってえー！！」

りょうは目を吊り上げて激怒している。肩を怒らせて仁栄の方へ近づいてくる。あと一歩で手が届くというところで、笛が鳴った。

「こらー！！ おまえら何やってるんだ？ 喧嘩の時間じゃないぞお！ さっさと列に並んで！ リレーの練習が始められんだろぅが！」

若林もいつになく厳しい声で怒鳴る。

「たった何人かのうちのクラスの生徒がこうやってもたもたしていると、きちんと並んでいる他のクラスの生徒は、何も出来ずにずっと待っているだけなんだぞ？ 悪いとは思わんのか？」

「……すいません」

俯きながら周りを見ると、驚くことに仁栄たち以外全てにクラスがきちんと整列して座っていた。仁栄はこの上なく恥ずかしい気持ちでいっぱいだった。恐らく女の子の方もそうだったに違いない。

「へへ、災難だったな」

列に戻ると、真後ろのトーマが意地悪い笑いを浮かべながら仁栄を待っていた。

「ったく。あの女が突っかかってくるから……」

「佐々木さんに石川さん、いつも仲良しだな。あと吉田さんも」

「え？ ああ……石川はいいけど、佐々木っていうのか？ あいつは……吉田？ 誰？ ってか、トーマ、よく名前覚えてるな」

そんなところに感心しながら、自然とふたりの方に目がいく。どうやら向こうもこちらを見て、何かを話しているようだ。しかしすぐにクラス対抗のリレーが始まりそれどころではなくなった。

「いけー！！」

「勝てるぞー！！」

「速い速いって!!」

「ゴーゴーヤマちゃん!!」

「うわっ! コケんなよっ!」

4クラス全員の声が一斉に応援の雄たけびを上げる。ものすごい熱気と興奮と騒音だ。周りの声などたちまちに聞こえなくなった。

「やっぱ3組は早いな……最初っから飛ばしてきやがった」

ふがさわしたける

アンカーの深澤武と花田たちが仁栄たちのすぐ後ろで話している。「ああ、でもぜってータケルが最後にゴボウ抜きだろ?」

「ああ、ぜってーいけるよ、なあ? おまえらもそう思うだろ?」

花田が仁栄たちに気づいて声をかけてきた。あの日以来、花田は仁栄、冬馬とよく話すようになっていた。

「おい、深水! 次の次おまえだぞ。頼むぜ」

武は無邪気な笑顔を向けている。クラスで一番の俊足で、野球が得意でよく放課後みんなと一緒に草野球をしている。仁栄も一度だけ一緒に遊んだことがあった。明るくて、人懐っこい性格で、友だちも多かった。

「おう!」

「石川さんが見てるぜ!」

後ろの冬馬がからかう。

「なっ! 何言ってるんだよ?」

「じゃあ、佐々木さんが睨んでるぜ!」

「あ?」

女子の方を見ると、りょうと目が偶然合った。すごい形相でこちらを睨んでいる。なんなんだあいつは……気を取り直して意識をリレーに集中させる。仁栄の前の走者が走り出した。素早く順番通りの位置へつく。3組、2組、1組、4組の順で走者が帰ってきている。2組との差はそれ程ない。手際よくバトンを受け取り、上手にペースを乱さずに走り出す。仁栄の素足が、ローラーの駆けられた真っ平らな土の上を何度も何度も力強く蹴る。バトンを握った手を上下にリズムよく振る。周りの声援、自分の鼓動。ただ目の前を走

る者に追いつこう、追い越そうと必死で、外側から攻める。ついに追いつき、隣に気配を感じた時には既に、次の走者である冬馬の背中が見えてきた。

「トーマ！」

必死の思いでバトンを冬馬に託す。

「任せとけ」

短い言葉を残して、冬馬は駆け出した。ほぼ2組と同時にスタートした冬馬だったが、たちまちに2組の走者を引き離していく。

「おおー！！　すげーぞ、遠山！」

冬馬の頑張りで1組は2位に浮上した。あとは、木崎、花田、本城そしてアンカーの武を残すのみ。練習とはいえ、順調に進んでいるようだ。

「よーし！　いい感じだー！」

「ぜってーいけるよ！」

「やっぱ、この順番最強だな！」

クラスが一層盛り上がっていく中、木崎、花田の健闘もあって、1組は1位である3組と約ふたり分の差まで追いついてきていた。あとは今走っている本城に、できる限り逃げ切ってもらい、アンカーの武で、巻き返す作戦だ。本城一は眼鏡をかけた気の弱いクラスメイトで、勉強は出来る方だが体育はまるで駄目な少年だった。

「しっかり走れよー！！　はじめえー！！！」

「タケル、頼むぜ！」

男子全員の期待が武にかかる。

「深澤くん、がんばってねー！」

さらに女子からも声援が上がる。位置につき一の帰えりを待つ武額にはアンカー用の赤い鉢巻を巻いている。

「ほんじょおおー！！！！」

「うわあああー！！」

一は足元をフラフラさせながら、倒れこむように武にバトンを渡

した。そしてそのまま転がるように地面へ倒れこむ。

「はじめえー！ー！」

「本城おー！ー！」

クラスの皆に引きずられながら列へと戻されていく。

「ったくよー。何でリレーごときで倒れるんだよお……ハジメガネくんはよお？」

木崎が目を細め一を睨みながら、わざとみんなに聞こえるように不満を漏らす。

一からバトンを受け取った武は、3位に落ちていた。少し前屈みになる走り方で、ぐんぐんと2組に追いついていく。その光景はまさに芸術だった。しかし結局最後まで2組を追い抜くことは出来ず、1組は無念の3位で終わった。

その日の運動会の練習が終わり、3年1組の教室では反省会らしきものが漠然と行われていた。担任の若林はまだ姿を現していない。「ちよつとー！ 本城くん一生懸命走ったんだからねー」

「あー？ でもオレたち、こいつのせいで3位に落ちたんだぞー！」  
木崎のこの一言は失言だった。誰かのことだけを直接的に責める言葉は、とても残酷に響く。しかし木崎はそんなことは気にしない。「そりゃそうだけど……」

「でも、木崎くんの言うことも事実だろ？ ハジメガネがもつとしかり走つてれば……」

他の男子も木崎の意見に味方する。いつの頃からか、『ハジメガネ』とうあだ名が定着していた。

「そうよね。足が遅い人にはもうちよつと頑張ってもらわないとおー」

「えーそれって誰よおー？」

「男子で言ったら、一だろ？ 女子だったら……」

「吉田じゃね？」

「えー！ ちよつとおー！ 勝手なこと言わないでくれるうー！」



「男子って冷たい、ってか無神経えー！」

吉田という名前が拳がつて、何人かが廊下側の窓際に座っている吉田由希子の方を見た。髪を長く伸ばした大人しそうなその子は、困ったように俯いている。

「ハジメガネのせいだから……」

その言葉が再び出た瞬間、ひとりの少年がガラガラと椅子を引きながら、立ち上がった。冬馬だ。

「本城ばっか、責めるなよ。それよりどうやって1位になるかだろ？ そっちのこともっと考えようぜ」

冬馬はクラス全員の視線を、わざと受け止めるように大声で言った。

「ジンエーはどう思う？」

「えっ？ ああ、そうだな。そうだよ。全く」

突然質問された仁栄は、何が何だかよく分からないまま席を立てただだ大きく頷いていた。

「なんだよ、そりゃ？ また眠ってたのか？」

冬馬が呆れた顔をする。

「なんだよ！ またって？」

クラスの中で笑い声が起こる。そこで担任の若林が教室へ入ってきた。

「悪い、悪い。遅くなった。急にお腹が痛くなっちゃってなあ」

クラスの笑い声は一段と大きくなった。

「それじゃあ、これから帰りの会を始めるぞ」

クラスがいつもの雰囲気に戻った後も、木崎だけはおもしろくなさそうに、冬馬の方を睨んでいた。当の冬馬はそんなことには気がつかないようで、ぼんやりと廊下側の窓の方を眺めていた。

## 一致団結

運動会本番当日。梅雨も明けたのか、清しい朝の中、次々と生徒たちが登校してくる。それぞれの教室では、みんながやがやと賑やかに体操服へと着替え始めていた。

「今日はぜってー勝とうな!!」

「おうー!!」

「弁当何持つて来た？」

「コンビ二弁当？ まじかよー!? 超金持ちじゃん!」

「やつべー! オレ、朝弁当ランドセルに入れたかもー!」

「で、手提げで来てるじゃん。まずくねーそれ? ってか手提げ何入ってんの? 筆箱だけじゃねー?」

「うわーっ!! 筆箱と弁当箱入れ間違えたー!!」

手提げからカラカラと筆箱が転がりだす。周囲からどつと笑い声が上がる。

「今日お母さん来てくれるかなー」

「うちは忙しいからダメー!」

「うちはお父さんがビデオカメラでちゃんと撮ってくれるんだー!」  
いつもとは違う運動会という特別な日に、みんなは興奮しているようだった。

「トーマは家の人来るの?」

カッターシャツのボタンを外しながら、仁栄はすぐ後ろの冬馬に話しかけた。

「いや、うちは忙しいからたぶん誰も来ないな。ジンエーは?」

「オレんちは母さんが来ると思う、父さんは仕事が忙しいから……」

「そうか……」

「おはよう! 今日はぜってー勝とうぜ!」

すぐ前の席の武が親指を立てて笑っていた。

「おっす、武! もちろんだぜ!」

冬馬と仁栄も親指を立てる。席替えする前から武の席は仁栄のすぐ前だったこともあり、仁栄も冬馬も武とよく話すようになっていた。そう、3年1組は少しずつまとまりつつあった。

「ちよつとー！ 今日足引つ張らないでよねー！！」

隣の席のりょうが、仁栄を睨みつけている。仁栄のクラスは先週席替えをしたばかりだった。3年1組の席替えは、ただ仲の良いものの通しがグループを作って、黒板に書かれた空席に、早い者順に名前を入れていくという方法で決められた。仁栄の班は、仁栄、冬馬、咲子、由希子、そして斜め隣には天敵？ の佐々木りょうが座っていた。

「どうやって女子のリレーに、男子のオレが足を引つ張れるんだよー！？ 関係ねーだろ！？」

「関係あるわよー！ あんたがコケたりして、負けたら、次に走る私たちのテンションが下がるって言ってるのよー！！」

「まあまあ、りょうちゃん……」

前の席の咲子がりょうを宥める。

「はははっ！！ 佐々木さんなりに、激励してくれてるんだぜ、きつと」

冬馬はカラカラと笑いながら仁栄の肩を叩いた。

「別にそういうわけじゃないけど……」

りょうはそっぽを向く。絶対、そういうわけじゃないだろうな……

…仁栄はそう思っただけで声には出さなかった。

「いつも2班は楽しそうでいいなあ」

武が額に赤い鉢巻を巻きながらを笑う。

「ただ隣がはちゃめちゃに五月蠅いだけだぜ」

仁栄は今度は思わず声にだしてしまった。りょうが透かさず何か言おうとしたその時、ガラガラと教室の扉が開き、担任の若林が入ってきた。

「おはようございまーす！！！！」

運動会本番当日の一日がついに始まった。

競技用のピストルが銃声と煙を上げた。驚いている暇はない。授業中にはけしつて見せない、真剣な表情を貼り付けた子供たちは一斉に走り出した。見守るクラスの皆様も、保護者たちも立ち上がって歓声を上げる。

しかしリレーも中盤に差し掛かった頃、その事故は起きた。多少の作戦の変更があった。一番足の遅い一を真ん中へ組み込む、その後は足の速い連中で挽回を図るというものだ。前回の失敗を考慮しての作戦変更だった。それに加え、他のクラスの予想を裏切るという期待もあった。皆うまくいくと信じていた。しかし先頭を走っていた一が足首をひねって転んでしまったのだ。そして後続が転んだ彼に躓き、層倒れとなった。土煙に咽ながら、一が悲鳴を上げた。

「うわあああああ！ げほっ！ げほっ！」

その場に転がる一に、先生たちが駆け寄っていく。他の走者はすぐに起き上がり、落としたバトンを拾い次々と走り出す。すぐに後を追うように、一のバトンを拾い走り出す委員長。その時、他のクラスとの差は半周以上広がっていた。

「まだ、諦めるなよーー！！」

「まだまだいけるってえーー！！」

「インチョーー！！」

「頼むぜーー！！」

3年1組の掛け声は、段々と大きくなり、そしてそれに保護者の声援までが加わった。

「頑張つてーー！！」

「諦めるなーー！！」

「頑張りなさいー！！」

「しっかりー！！」

委員長からバトンを受け取った仁栄は走った。委員長によって、さらに前走者との差は開いた円をひとり走った、たくさん声援を受けながら。必死で走った。皆の視線を浴びながら、恥ずかしいよ

うな、照れくさいような感情と一緒に。走ることによってなのか、そういった感情によってなのか、心臓の音がバクバクと聞こえてきた。周りに走者がいないと、自分が本気で走っているのかどうか分からなくなり、地が足に着いていないような気になった。それでも仁栄は懸命に速く走った。そしてバトンを冬馬に手渡した時、それはやっと辿り着いたという心境だった。

「いい走りだったぜ」

列に戻るとアンカーの武が鉢巻を締めなおしながら、親指を立てていた。花田、武を含めてあと7人の走者が残っていた。

「どうなってる？」

状況を確認しながら前に座っている委員長に聞いてみる。今回の一転倒で、有力候補の3組は2位に転落し、2組、3組、4組の順で、その後を1組が追っている。4組との差がわずかになっていた。

「うわっすげーじゃん……」

「さっき4組のやつが躓いたんですよ、ラッキーでした」

委員長が振り向いてピースサインを見せる。委員長の岡本は時折敬語を使う癖があった。

「マジかよ、気づかなかった……ラッキー」

「バーカ、全然ラッキーじゃねえよ」

「え？」

走者の列に座っていた木崎が、不愉快な顔したまま立ち上がる。

「ぜってー今頃は1位だったのによーあのくそがよー……」

その視線の先は保健室の方を向いていた。

仁栄、冬馬の頑張りのおかげで、1組は3位に浮上していた。しかし一位の2組との差は半周近くついていた。位置についた木崎はまだ不愉快な顔を浮かべている。

「あー、やる気ねー……」

バトンを受け取った木崎の走りは、明らかに手抜きだった。まったくやる気が感じられない走りだった。3位との差は大きく開いて

いき、あつという間に4位へと落ちた。そしてその影響はその後の走者の走りにも影響していった。アンカーの前の花田がバトンを受け取る頃には4位の4組との差は開き、すぐ後ろに1位の2組が迫ってくるのが見えるほどになっていた。

結局1組の男子は、花田とアンカーの武の頑張りも虚しく4位で終わった。しかしそれは誰が見ても分かる手抜きな終わり方であった。

校長先生の閉会の言葉を聞き終わり、仁栄と冬馬が教室へ戻ると、木崎が大きなバンドエイドを足に貼っている一を非難していた。生徒たちの多くはまだ運動場から帰ってきていなく、教室はガラガラだった。

「おめー、何こけてんだよ？ あ？ 超大事な時だぜ、こらあ？ 分かってんのお？」

「……ごめん」

泣きそうな顔で俯きながら一は答える。

「あ？ ぜんっぜんっ聞こえない！」

木崎が一の肩を掴んで揺らし始めた時、冬馬が声を駆けるよりも早く、甲高い声が教室に響いた。

「ちよつとー！！ そんなに本城くんばっか責めなくてもいいでしょー！！ 自分だってダラダラ走ってたじゃない！！」

りょうが手を腰に当てて木崎の真後ろに立っていた。

「あ？ 何だおめー？ あ？ またおめーか？ また泣かされてーのかあ？ あ？」

木崎が眉間に皺を寄せてりょうの方へ歩み寄る。木崎にとって男子も女子も関係ない。歯向かってくるものは全て敵で同等に扱う。りょうは自分よりずっと背の高い木崎を前にして、震えていた。その時、二人の間に飛び出そうとしていた冬馬が仁栄の耳元に囁いた。「正義のヒーロー気取る時だぜ」

そして冬馬は仁栄の背中を押した。押された仁栄はふら付きなが

ら、二人の間に割って入る形となり、木崎の肩に軽くぶつかった。

「うわっ！」

「わっ！ あん？ 何だおめー？ やんのか、こら？」

そう言つて木崎は仁栄の襟元をぐいつと掴んだ。

「何やってんだおまえらー！！！！！」

教室の入り口には担任の若林が鬼の形相で腕を組んで仁王立ちしていた。

## 逡巡

布団に入ってから、仁栄はしばらく眠れずに今日のことを考えていた。リレーのこと、木崎とのこと、若林先生が言ったこと、そして帰り道に冬馬が言ったこと。

帰りの会で若林は、今日の運動会のことを立った一言、残念だったと言った。その声はとても穏やかであった。本当はもっと怒鳴られるかと覚悟していたクラスの皆が、なんとなく肩透かしをくらったようなそんな顔をしていたのを仁栄は思い出す。しかしその穏やかではあるが、とても悲しげな一言は、クラスの皆の心に先生の真意をまっすぐに伝えたように仁栄には思えた。とにかくすぐ後味の悪い運動会だった。教室を出る時に見えた後ろの黒板に書かれた文字。今週の目標「一致団結」の文字は薄く消えかかっていた。

そんな暗い気持ちのまま仁栄は冬馬と一緒に下校した。まだ陽は高く、熱かった。遠くで鳥の囀りが聞こえる。

「今日はなんか、残念だったな……」

手提げをブラブラさせながら仁栄は言った。

「みんながみんな残念だったわけじゃないだろうけど、一致団結とは程遠かったな……」

両手をポケットに突っ込んだまま、冬馬は俯きながらそう言った。「何で先生はもっと怒らなかったんだろう？」

「何も言わない方がよく伝わることもあるんじゃないの？」

「そうか……トーマってよく分かってるよな、そういうこと。なんか大人みたいだな」

「まーな。精神年齢26歳だからな」

「ははっ」

仁栄はそう笑ってみたものの、本当は精神年齢の意味がよく分かってなかった。ただ冬馬と話していると、なんとなく自分も少し大人になった気になった。そして何より楽しかった。仁栄は手提げから



弁当箱を取り出した。昼間に全部食べられずに、お握りをふたつ残しておいたのだ。

「あっ！　そういえば何でさっきオレの肩を押したんだよ？　おかげで木崎とはもめるし、先生には怒られるし、だいたいなんでオレが佐々木を助けるんだ？」

後ろ歩きにお握りを頬張りながら仁栄は振り返る。

「バーカ、あれは不可抗力だよ」

冷静な表情のまま冬馬は惚けた。

「フカコウ……何だって！？」

「女の子には優しくしなきゃいけないんだよ。それに……」

「ちえっ！　何だよそれ」

頭では分かっているけど、仁栄には完全に冬馬の言葉を理解できないでいた。

「それに……佐々木さん、たぶんおまえのこと好きだぜ」

「ゲホッ！　ゲホッ！」

お握りを飲み込むタイミングを間違えた。何とか飲み込むと仁栄は涙目で訴えた。

「ゲホッ！　何で分かるんだよ、そんなこと！？」

「オレにはなんとなく分かるんだよ」

「どうしてだよ？　だってあいついつも突っかかってくるし、絶対嫌ってるだろー」

「大丈夫だよ。そんなこと普通だよ。仮に今はまだ好きじゃなくても、もうすぐ好きになるよ」

「え？」

冬馬の言っていることに頭が混乱していくそのその時、目の前に大きな水無し川に架かる大橋が広がった。

「じゃあまたな！　火曜日！」

「おい！」

突然駆け出した冬馬に、仁栄はただその場に立ち尽くし残りのお握りを飲み込むだけだった。

眠れずに何度も寝返りを打つ。何で佐々木がオレを好きなんだよ。それになんだよ、もうすぐって。女子なんてうるさいだけじゃんか……仁栄は勢いよく布団を頭から被った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8520u/>

---

パラレルワールド

2011年10月2日03時31分発行